ヴァイオリンの早期指導

ヴァイオリン指導で世界的に有名な鈴木鎮一先生は「音楽家に生まれつきの天才というものはいない。すべて生後の学習によるものである。とりわけ、幼児期の教育による。もしもベートーベンが音痴に育てられていたとしたら、きっと音痴になっていたに違いない。反対に、ベートーベンと同じ環境で同じように育てられるならば、だれだってベートーベンのようになれる」と、確信をもって常に語っていらっしゃいます。

事実、鈴木先生は、幼児期から、その環境を整えることにより、だれでもすばらしい音楽的才能が育つことを、江藤俊哉、豊田耕児さんなどを育て上げることによって実証しています。

毎年武道館で、鈴木先生の門下生一千人が、大合奏を演奏しますが、その壮観さは全国の皆さんにぜひお見せしたい、お聞かせしたいと思います。

一千人の心が一つに結集して、美しいメロディーをかなでる、その言語に絶する美しさにひたりながら私は考えました。「この美しい音楽を演奏する能力は、鈴木先生のおっしゃるとおり、彼らが毎日美しい音楽を耳にするという環境の中から、自然に育ったものに違いない。とすれば、美しい心を持った人間に育てるためには、幼児期から、美しい人間の心というものを知らせ、それに常にひたらせておくことが必要なのではなかろうか」と。

殺伐たる現代教育

今、大学の数は、戦前の中学の数に匹敵するほど、教育は普及しています。しかし、人間の心は、それに比例して美しく成長しているでしょうか。成長するどころか、戦前には見られなかった醜い心の人間が至るところに充満しているようです。

教育とは、大学を出て、知識が豊かであればそれでよいというものではありません。学校は出なくても、社会のためになるりっぱな人がたくさんいます。これらの人は、りっぱな教養を仕事の中で、生活の中で身につけました。堕落した学校よりも、活気に満ちた秩序ある社会の方が、また、愛と信頼に満ちた家庭の方が、教育的環境としてはずっとすぐれているよい証拠だと思います。

いわゆる教育ママの多くは、競争のはげしい有名校に進学させることを願っていますが、その中には、級友は皆競争相手であり、敵である、と考え、暖かい友情など全くないという殺伐たる学校が多いこと

に注意をしたことがあるでしょうか。

反対に、大学合格率は悪くても学友がたがいに手を取り合って、助け合い励まし合って学業に努力している、友情に満ちた学校もあります。しかし、このような学校では今のモーレツ社会に適応できる人間にはなれないと考え、これを敬遠する教育ママはいないでしょうか。

殺伐たる学校は至るところにありますが、暖かい友情に満ちた学校は千に一つも存在しないこのごろです。しかし、これらはすべて、今の世の親心のあらわれだと私は思っています。世の親の多くが嫌うタイプの学校がふえて、希望するタイプの学校がへる理由がどこにありますか。口先では何と言おうとも、事実として、人々の求めるタイプの学校がふえるのが当り前です。

しかし、いわゆる有名校を出、出世コースに乗ったとして、それで目的が果たされ、幸福になれるものでしょうか。また、親としてそういう子になれば満足できるものでしょうか。

殺伐な学校で、思いやりの心、友情というものを全く知らないで育った者が、ただがむしゃらに働くだけで、家庭を省みず、親の愛情に報いることを知らない人間になっても、それは当然のことです。

現代っ子の心はわからない、と言って嘆く親が多いこのごろですが、現代っ子は今の世の親の心の反映です。親の心の動き、日常の行動が、すべて今の子どもの心や行ないを育てているのです。人間の子どもでさえ、狼に育てられれば、狼のような荒々しい子どもに育つではありませんか。今の子どもが、どんなに悪いものがあるとしても、それは子どもの責任ではありません。親の責任です。

古い昔話の価値を

戦後、私たちは、私たちの心を育ててくれた古い物語を捨ててしまいました。それで、今の子どもは、愛や正義を貫き通す勇気を知らないのです。悪を徹底的に憎む心が育たないのです。花咲じいさん、桃太郎、舌切雀、カチカチ山、猿蟹合戦、これらの昔話は、幼児たちを楽しい世界に引き込んで、日本の心を育てていたのです。

西洋の童話、新しい漫画が絶対にいけないと言うのではありません。ただ、基本に、日本の古い昔話を持って来たいと思うのです。子どもたちに、愛と勇気を奮い起こさせるような物語を与え、読ませ、味わわせることによって、子どもを育てたいと思い、その前提として、“読書力”→“漢字力”をつけてやりたいと思うのです。